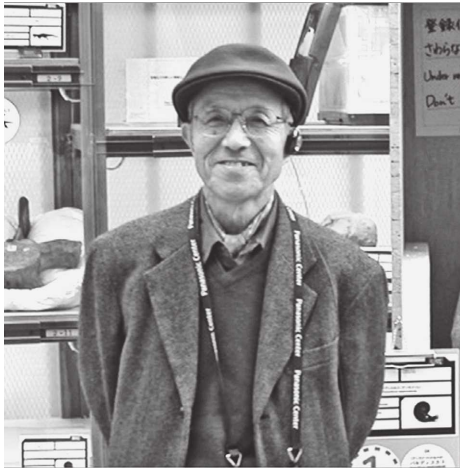


[追悼]

糸魚川淳二先生の思い出

松岡敬二*



化石研究会設立当初からの会員で、1990-1992年の間会長も務められた糸魚川淳二名古屋大学名誉教授が2021年11月11日に亡くなられました。

先生は、岐阜県恵那郡坂下町（現中津川市）の出身で、太平洋戦争をはさんで1945年4月に奈良県高市郡八木町（現橿原市）の海軍経理学校予科入校し、戦後恵那中学校第四学年に復学された後、1946年9月旧制第四高等学校理科甲類に入学されました。旧学制から新学制への移行措置期間となったため1949年3月に卒業し、同年4月に京都大学理学部に入学され、1952年4月には同大学大学院研究奨励学生となりました。1957年4月には京都大学理学部大学院に入学、同年8月に退学され、名古屋大学理学部地球科学教室地史学研究室教員として就職されました。1958年2月に助手、翌年に田口登美子さんと結婚され、研究に邁進されることとなりました。1971年5月に助教授、1986年4月教授となり、定年退職の1993年3月まで同職にありました。その後、2000年3月まで椋山女学園大学文学部教授を務められ、椋山女子大学、島根大学、名古屋大学等の非常勤講師もされました。

先生の研究は、1953年の宮崎層群産 *Siphonalia* 属の新種記載に始まり、1960年の瑞浪層群の古生態学的研究が学位論文となりました。瑞浪層群をⅠ・Ⅱ・Ⅲの

堆積ユニットに区分し解析した軟体動物化石の研究は、中部地方以西の中新世古地理復元の礎となりました。現生貝類の生態データに基づく古環境解析は、横山次郎教授の指導と京都大学理学部に職があった黒田徳米、波部忠重両博士の存在が背景にありました。両先生の日本列島産貝類の緯度分布と生息水深をまとめたチェックリストは、先に述べた3つのユニット中新世の軟体動物群集の古生態復元の基本的データとして使われました。中新統のユニットⅢのはじめには、短い期間日本列島が熱帯環境下にあったとして「トロピカル・スパイク」と呼ばれました。その科学的証拠となる花粉、貝類、甲殻類の化石、古土壌などの研究と並行して、現生のマングローブ沼の貝類群集やマングローブ林の調査を進められました。私が指導を受けて初めて新種記載した備北層群産ビホクオオシジミは、先生の著書『日本列島が熱帯だったころ』（1990）に熱帯系要素として加えられました。この普及書は、先生が毎年6-10の論文を出されている時期であったので、どのように執筆されているのか聞いたことがあります。晩酌後に原稿用紙10枚ぐらいをめどに毎日書き、飲みすぎた時には次の日にその分を書くとのことでした。新書なら1か月ほどで書き上げることができるとい話から、その筆の速さに驚かされました。

私は、糸魚川先生や柴田博先生の瀬戸内中新統の研究にはとても足元にも及ばないと考え、古琵琶湖層群の貝類研究へと研究テーマを変えたいとお伺いにあがった時のことです。すると、「古琵琶湖層の研究は京都大学や大阪市立大学の研究者が取り組んだフィールドであり、残された分野は少ないとの現状であり覚悟して事にあたるように」と助言され、研究テーマの変更を許可されました。先生の指導は、横山次郎先生の教え「こちらからうかがわない限り、何もおっしゃって頂けなかった。よく言えば自由性尊重であり、悪く言えば放任であった。」を踏襲されていました。生活費をアルバイトで賄う研究生時代は、蝸牛の歩みではありましたが論文原稿を持って行くと、文中の細かな添削ではなく、内容構成を箇条書きにしたものを頂きました。書き直したのを持って行っていく

*本研究会元会員 E-mail: matsukei@mx1.tees.ne.jp

ごとに原稿はすぐに次の指示を与えられ投稿まで何度も続きました。当時の地史学講座のトップは森下晶教授であり、「ほとけの森下」と学生たちが評し研究に関しても寛大でした。一方、糸魚川先生は学問に対する姿勢や研究量にたいして大変厳しく「鬼の糸魚川」と評されていました。これは、先生の実践してこられた研究経歴からも読み取れ、「ハングリー」精神で日々精進せよとの教えであったと認識しています。それに応えるのに10年もかかりましたが、先生が教授に就任された翌年に地史学研究室としては最年少で理学博士の授与に導いて頂きました。

先生の博物館との関係は、1972年始まった中部自動車道の工事により採集された大量の化石資料を展示する入れ物としての瑞浪市化石博物館建設の関与から始まりました。1974年3月から奥様とイギリスとフランスの在外研究員として1年間赴任された際に、イギリスのウェールズ州スオンジーの博物館、フランス、スイス、イタリーの博物館を巡られました。また、1977年8月には第10回第四紀研究国際連合会議出席とイギリス、フランス、ベルギーの博物館を1か月にわたって巡歴されたことが、1978年発行の名古屋豆本第21集『ヨーロッパの小さな博物館』の執筆につながり、博物館学への道が開かれたのだと思います。

瑞浪市化石博物館の開館後は学芸員（嘱託）として、展示物、調査研究の指導、教育普及活動等を企画し実践されました。夏休みに開催される子供たちの化石教室（当時は、サマースタディ中級）は、先生とともに9年間講師となり、学芸員の仕事を体験させていただきました。学芸員として通用するかどうか判断しようと言われていたのかもしれませんが、私も研究以外に博物館での教育普及活動の意味や楽しさを知ることができました。その経緯から学位習得後、豊橋市自然史博物館の就職へと導いて頂きました。私にくださった『博物館を考える 続博物館だより』（1982）の扉には「博物館はもの与人」と自著されており、私が進むべき道が暗に示されていました。

豊橋市自然史博物館は、準備室がない中で糸魚川先生が博物館の展示物設計・製作に主導的に関与され1988年5月に開館しました。開館後は古生物学の専門家として資料購入における鑑定業務も含む顧問として、さらに教育長が兼務していた館長職を2001年から2004年3月まで専任の館長として務められ、博物館の組織体制刷新にも尽力いただきました。1991年に千葉県立中央博物館で第140回日本古生物学会例会が開催されました。その中で糸魚川先生と濱田隆士先生がコンビナーとなり「新しい自然史学と博物館」というシンポジウムを企画され、開館2年目の公立館の現状を発表する場を頂きました。さらに、豊橋市自然史博物

館の知名度を上げるために、1991年の第94回化石研究会例会、2009年第132回化石研究会例会、1995年日本貝類学会平成7年度大会と学会誘致へと繋がっていきました。

糸魚川先生は、年間50の博物館を見ているとの博物館人としての姿勢を示されました。さらに専門外の趣味に関連したコレクションの収集は、生活を豊かにし、それと「わたくし博物館（ミニウム）」を作ることが目標とされていました。実際、石版画の印刷機、個人コレクションと地元の若手芸術家の作品を展示する半原版画館を自宅に併設されました。大学の現職のうち半原版画館の学芸員として、途中から館長として岐阜県博物館協会にも加入されました。個人コレクションである石版画、千社札などの収集品は、名古屋などの古本屋・古道具屋、骨董市に計画的に出かけられ、購入されるものです。これはヨーロッパの博物学誌にある見事な極彩色の砂目石版画に魅了されたことが根底にありました。自らも、木版画を制作され、額装した版画と自作の版画を表装された著書『日本の自然史博物館』を退官記念品とされました。

東濃を基地として1990年に始まった「東濃シデコブシを守る会」は、翌年「日本シデコブシを守る会」へと発展し、会長も務められました。保全活動は、「人と自然の付き合い方の問題」で、持続可能な発展が求められると提言されました。住民参加の地域運動を進める博物館の社会活動は、先生の「えこ」ミュージアムの根幹をなすものです。さらに、博物館学（「僕は博物館学を講じているのではなく、私の考える博物館論を説いている」）としての総体性は「包括的博物館」であると述べています。先生の考える博物館論は、「つなぐ」、「まとめる」、「包み込む」を基本理念とし、「立体的ネットワーク博物館」としています。豊橋市自然史博物館の改装された古生代・中生代展示室は、先生の「包括的展示」に達していない点を指摘され、中断していた新生代展示室の改装にむけさらなる高みをめざした理念「生まれる－変わる－発展する」をいただきました。新生代展示室は、古生代から中生代展示室への改装の展示技法は踏襲しつつ、生物の進化をたどりながら豊橋総合動植物公園内の生き物たちについて学び、私たち人類の未来に思いをはせる構成となっており、「包括的博物館」に近づいたものになりました。

これまで取り組んだ研究業績等を昨年5月に先生にお送りしましたら、「長い間御苦労様でした。これからは好きなことがいっぱい、子供たちの成長に◎」とのお葉書をいただき、はじめて先生から合格点をいただいたものと思っております。

瑞浪市化石博物館の柄沢宏明博士から、先生が夏頃

から病魔に襲われ入院されていたとのことで、今は自宅へ帰られ、会うことができる旨の電話が11月4日にありました。翌日瑞浪市半原のご自宅に行くと、すでに声は出せない状況でしたが、私だとわかったと意思表示はされました。再度病院に戻られた先生は、6日後に92歳で永遠の眠りにつかれました。遺言により、遺灰は長く住まれた瑞浪とふるさとの岐阜県中津川市（旧坂下町）の地に、帰されると奥様にお聞きしました。

最後に、糸魚川淳二先生の追悼文は、瑞浪市化石博物館研究報告（瑞浪市化石博物館の柄沢宏明博士）、

日本第四紀学会・日本地質学会（名城大学の齊藤毅博士）、日本貝類学会・日本古生物学会（静岡大学の延原尊美博士）と後年の門人が充実した研究・教育面の業績を寄稿されています。前年の門人の一人である私は、3人の博士の追悼文を参考にしながら、公私にわたり指導していただいた先生のお教えの一端を書き、追悼としました。

長年お世話になっている奥様の糸魚川登美子さんと、寄稿の場をいただいた化石研究会誌編集長の小幡喜一氏に感謝申し上げます。